連載

良い仕事

優れた事例から技術者がなすべき仕事を考える

第34回 日本の鍬づくりを支える鍛冶屋、相田聡氏

佐藤R&D　　佐藤　国仁*

*さとう　くにひと：代表取締役、(一社)技術士PLセンター代表理事、京都大学・鳥取大学・長岡技術科学大学非常勤講師、(一社)日本機械学会技術倫理委員、技術士(機械部門、総合技術監理部門)。1992年から製造物責任法、1997年から機械安全、2000年から技術者倫理に取り組む。この過程で「技術者の良い仕事」という視点を確立した。

バブル崩壊の直前、証券会社を辞めて飛び込んだ鍬の世界。しかしバブルの時代に大切な商流が失われ市場とのつながりを断たれていた。鍬の修理業を起点に置いた新たな事業を構築し、野鍛冶業を現代によみがえらせた相田聡（あいださとし、以下相田と記す)氏(**写真1**)を紹介する。

先祖の創業

1930年(昭和5年)、新潟県三条市に相田家に連なる兄弟親戚縁者が出資して相田合同工場を創業した。ただ、実際にはその前からそれぞれに農具をつくっていたようだ。戦争激化に伴い、材料調達などの便宜を受けるため、昭和18年に産業報国会のもとに相田合同工場に再編された。

写真1　相田聡氏

相田の生い立ち、証券会社を経て家業に入る

相田は1962年(昭和37年)7月生まれ。昨年で還暦を迎えた。ご両親は健在で、父は店頭に立つ。下に妹と弟がいる。地元高校から大東文化大学に学び、卒業後は証券会社に入った。世間はバブルのまっただ中。1989年12月29日、大納会のこの日、日経平均株価は終値で3万8915円のピークを付けた。世はバブル絶頂に沸いていた。この後1997年11月に山一証券が自主廃業してバブルが完全についえたのだか、1989年の絶頂の直後、相田は証券会社を辞め、家業を継いだ。見事な転身だが、これには理由があった。

バブルの時代は極端な人手不足であった。3K(きつい・汚い・危険)が嫌われ、相田の実家の家業も人手不足。そのときに職人が倒れた。俺の代で廃業してもよいか、と父たちが考えた。その日の仕事が終わった頃にこの話を聞き「なんか忍びねえな、これで終わっちゃうのかよ。一人の職人が抜けることで廃業になっちゃうのはちょっとどうかな」と考えて、奥さんと相談し、じゃあ俺が今の仕事を辞めてこちらを手伝おうかということになった。早速当時の三条市高等職業訓練校（現、新潟県立三条テクノスクール）に通って鍛造と溶接を学び、工場の職人として仕事を開始した。